

聖ヨハネホスピス通信

ISSN 0919-0457



NO. **57**

2012.12.20

発行 聖ヨハネホスピス

〒184-8511東京都小金井市桜町1-2-20 TEL 042-388-2888

巻頭言…………… 林 裕家……………1	コンサートのお知らせ…………… 5
お医者さんのお茶っこ…… 大井 裕子…2~4	研究所だより…………… 近藤百合子…5~7
コンサートのお礼…………… 4	講演会のお知らせ…………… 8

巻頭言

ホスピス病棟 部長 林 裕家

がん対策基本法の施行、団塊の世代の高齢化の問題もあり、国は政策として緩和ケアを広めるために、緩和医療のマニュアル化、ガイドライン化を押し進め、がん医療に携わる医師に対しては、緩和医療の研修会への参加を求めています。ですがその動きとは逆に、ホスピスの相談外来にいらっしゃる方、入院されて来る方々が置かれている状況は、10年前よりもむしろ悪くなっているように感じます。辛い症状でお困りの方。病状や今後のことについて説明や相談がないまま退院を迫られているご家族。ホスピスの説明をするための外来はさすが、お会いしたことのない患者さんの病状や薬の説明に多くの時間を割いてからでないと、ホスピスの相談が始められなくなっています。また、入院された方には、ごく基本的な薬の処方や変更、処置でお困りの症状を和らげられることが少なくありません。難しいことではなく、基本的なケアが欠けているように思います。

ある著名なパティシエの方のお話です。フランスの有名店で修行することになり、どんなにすごいレシピがあるのかと期待していたが、製菓学校で習ったレシピと全く同じだった。しかし素材を吟味し、忠実に量り、作業する。一切の手抜きなく誠実にレシピを守り続けることで、こんなにも味が違ってしまおうのかと驚いたそうです。

聖ヨハネホスピスでは、当然緩和医療の基本をきっちり守ります。特別のマニュアルやガイドラインがあるわけではありません。開設以来大切にしているのは『ホスピスマインド』です。スタッフ全員が（ボランティアさんももちろん含めて）、おいでになる方々の価値観を尊重し、寄り添い、職種や枠に囚われることなくできる限りのお手伝いをする事です。その結果として、「ここに来て良かった、楽になった。」と言っていただけるのだと思います。マニュアル、ガイドラインが作られる際には、ホスピスマインドのように客観的に評価できないもの、数値化できないものは軽視されがちです。ですが、マニュアルやガイドラインは、ホスピスマインドがあって初めて生きたものになるのだと思うのです。

2012年4月よりホスピス科部長を仰せ付けられました。マニュアル全盛の緩和医療界、そして何よりスタッフ不足と当ホスピスは厳しい状況にありますが、これまでの仲間によって培われてきた『ホスピスマインド』はきっちりと守り育て、ホスピスケア実践して行きたいと思っています。これからも、聖ヨハネホスピスへのご支援を宜しく願いいたします。

「お医者さんのお茶っこ」

～ホスピス緩和ケアを被災地支援へ～

ホスピス病棟 医長 大井 裕子

関東から北海道の緩和ケアに携わる医師10名からなるチームが、東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県大槌町で「お医者さんのお茶っこ」を始めたのは昨年10月でした。緩和ケアと被災地での活動、いったいどういつながりがあるのでしょうか。このことについて考えていくと、緩和ケアの本質が見えてきます。

震災発生から比較的早い時期に仮設住宅が建設され、津波で自宅を流された人たちは避難所から仮設住宅に移っての生活が始まりました。震災後に様々な支援が入る中、緩和ケアに携わっている医師として自分たちにできることはないだろうか、日本緩和医療学会のメーリングリストの中で声が上がっていました。ちょうど8月ごろだったでしょうか。有志10人でHOPE FOR IWATEというチームを結成し、今何が求められているのか、どういう形なら可能なのか、チーム内で話し合いが始まりました。

メンバーの半分は面識がなく、それぞれ違うバックグラウンドを持つにもかかわらず、何度も意見交換をするうちに共通するマインドを持ち合わせていることを確認し合うことができました。そのマインドこそが緩和ケアの本質なのだ、あとになってわかりました。話し合いの結果、チームで共有したもっとも大切な理念は、私たちの活動が押しつけになることなく、あくまで必要とされる場所で、そっと寄り添うようなものにするものでした。そして、話しやすい環境を整えつつ関係性を構築し、被災された方の語りを引き出し、自らの力で困難を乗り越え自律性をもって生きることを支えていくことを目指しました。それはまさに、私達が緩和ケアの現場で日常的に行っていることを被災地でも実践しようというものでした。こうして具体的な活動の形として「お医者さんのお茶っこ」が誕生しました。お茶っことは、東北の言葉でお茶会、お茶を意味します。つまり、私達が仮設住宅の談話室にお邪魔して、「お茶っこ入れて待っていますから、一緒にお茶っこしながらお話ししたい人はどうぞいらしてください。」と言って待っているというものです。

すでに震災の直後から「こころのケア」を目的

にたくさんの支援が入っていたそうです。これは阪神・淡路大震災の教訓から生まれた動きですが、精神的側面から早期に治療が必要な人をスクリーニングすることができた一方で、こころのケアが必要だとしてニーズのないところにアプローチをされた人の中には、まだ話をしたくない、思い出したくない、あるいは自分にはそう言ったケアは必要ないと感じた人もいたようです。私たちがホスピスで出会う方々が、病気を抱えてつらい、悲しいと思うことは当然のことであるように、被災した方がたくさんの大切なものを失い、今までに味わったことのない恐怖や体験から茫然自失の状態になることも当然のことです。その苦痛は、精神的側面のみで解決できるものではなく、身体的・社会的苦痛、そして生きることを問うような苦痛（スピリチュアルペイン）も含めた全人的苦痛としてどう向き合うかを考える必要がありました。スピリチュアルペインとは、なぜ自分だけ生き残ってしまったのか、こんな状態で生きている意味があるのかなど、自分の生きる意味を問うような苦痛のことです。イギリスの近代ホスピスの創始者シシリーソングダースが、癌患者の苦痛には身体的、社会的、精神的苦痛とスピリチュアルペインの側面があると考え、癌患者のケアにはこれらすべてを含めた全人的苦痛と向き合うことが必要と唱えたことが現在の緩和ケアでも受け継がれています。

「お医者さんのお茶っこって、なんだかよくわからないけど行ってみようか。」

最初はそんな雰囲気だったと思います。時間になると、ぼつりぼつりと仮設住宅に住んでいる方が集まり始め、たわいのない世間話が始まります。しかしここは貴重な情報交換の場でもありました。あそこのお寺はこうだったらいい、あそこのお嫁さんは…、あの時あそこのおじいさんが…などなど。しかし、話題は次第にご自身の地震、津波の体験談に変わっていきました。それは、想像を絶する壮絶な体験です。沿岸部の地形の特徴もあいまって海水は集落の中を洗濯機の水のようにぐるぐるとまわりながら襲って来たそうです。その津波は高台に逃げる人たちを飲み込みまし

た。それを目の前で目撃し、すでに息絶えた人たちを必死で高台にひっぱり上げた、家と家の間に挟まれたけど津波で家が動いて隙間ができたところで近所の人に助けられたなど、堰を切ったように話し始めました。涙を流しながらただ聞いていた人もいました。津波で、あるいはそのあとの火災で家族を突然失った方、自分自身が津波にのまれて大変な恐怖を味わい命からがら助かった方、自宅など全財産を失った方、震災後も厳しい環境での生活を強いられ体調を崩している方、周囲の人の体験を聞けず、自分の体験も話せず、感情を自分の中に閉じ込めて数か月過ごしている方々。もうすでに、震災から半年以上が過ぎていたというのに、初めてこのような話をした、やっと話せたと多くの方がおっしゃいました。次第に仮設住宅周辺の自宅に住んでいる方に、お酒ばかり飲んでいる人がいるということや、家からまったく出てこない人がいるということもこのお茶っこの中でわかってきました。複数の医師が訪問した際には手分けをしてそういった方を訪ねて一緒にお茶をいただきながらのんびりお話しして、少しずつ活動の範囲を広げていきました。「お医者さんのお茶っこ」に集まって来られるのは当初仮設住宅に住む方々でしたが、自宅にいらっしゃる方の参加も増えてきました。他の仮設住宅でもお茶っこをという声を多数いただきましたが、私たちは活動の継続性を大切にしたいため仮設団地

でのお茶っこは3か所に限り、それ以上広げることとは困難だと判断しました。

この活動を開始する前に計画していたもう一つの大切なことがありました。それは、警察や消防、役場といった、被災した方の救助や支援をする立場の方々とつながることでした。彼らは、支援する立場でありながら同時に被災しているケースが多いだろうということ、彼らが慣れない業務の中で多大なストレスを抱えているだろうということが容易に想像できたからです。そのつながりを求めて、私が初めて大槌町を訪問した11月警察と消防に私たちの活動についてお話に行きました。私たちは緩和ケアの現場で日頃はがん患者さんやそのご家族と関わる仕事をしていること、10月から仮設住宅の談話室で「お医者さんのお茶っこ」を始めて定期的に訪問していることをまずお話ししました。そして、警察や消防の方には、そこに来ていただいて防犯情報や防災情報などちょっとしたお話をしてほしいとお願いしました。最初は、「もうアンケートは受けたよ。」と敬遠されましたが、じっくりお話しした結果、翌日から警察の方がお茶っこに来てくださるようになり、消防の方には救命の講習をして頂いたり、仮設住宅の方と警察、消防とのつながりもできました。こうして私たちの活動は、少しずついろいろな人とのつながりが広がることも実感しながら続いていきました。



(左) 震災直後、ご遺体が発見された場所にはこの赤い旗が建てられました。そこにひとりひとりの歴史があったことを感じながら、私たちの活動ははじまりました。

(右) 仮設住宅におすまいの女性。最近おしゃれをする気分になったそうです。今みんなに伝えたいこと。「この地震のことをわすれないでほしい。そしてどこにいても、今地震が来たらどこに逃げるかを考えておいてほしい。」

私たちは日常の業務の傍らボランティアで活動しましたが、10月から3月までの6か月間、3～4日の滞在を原則とし、必ず1週間に一度は誰かが仮設住宅を訪問できるようにすることと決め、活動内容はFacebookを利用しほぼリアルタイムで共有しました。活動報告を受けて、あたかも自分が現地に行ったような感覚に陥りながら課題を話し合いました。そして新たなミッションを次に行く人が実践するという仕組みでした。私たちは必ず「また来ますよ。次は〇〇先生という、優しい先生ですよ。」などと言って次の人を紹介して帰りました。そして、その言葉通り次の週には別の医師が訪問し、前回までの流れをまた次につないでいくという形が自然とできあがりしました。こうして自分一人ではできない活動がチームとして動くことで可能となったわけです。

私たちの活動は、震災直後に発足した「つなげるつなげる委員会」がサポートしてくれています。その代表である笹原留似子さんは震災直後から岩手県沿岸部を中心にご遺体の復元をボランティアで行っていた復元納棺師です。震災後から頻繁に沿岸部を訪れていたため、大槌町に支援が必要と感じSOSを発したのが発端で、われわれは大槌町で活動することになりました。東京から新幹線で2時間半の北上市に滞在し、そこから大槌町までの往復を毎回送迎してくれました。この時間は非常に貴重で、彼女から震災後の岩手県の状況や問題を抱えている人の情報をたくさんいただくことができました。驚いたことは、納棺師としての仕事をしている彼女が、われわれと同じような緩和ケアのマインドを持っていたということです。つまり、私たちがホスピスの玄関でお見送りをした後にかかわることになる彼女の立場で、ご遺族が少しでも穏やかな気持ちで大切な方をお見送り

できるように関わるそのマインドです。私たちと彼女との出会いは、偶然のようですが必然でもあったかのように感じます。

私達の活動は、話しやすい環境を整え、関係性を築きながら被災した方がお話ししたい気持ちになった時にじっくり時間をかけてうかがい、その方の持つ苦しみをトータルペインとして受け止めることから始まりました。これは、緩和ケアだからできたことだろうと思います。私たちは医療行為を行わないため身体的な問題に対しては医療相談程度のことですが、彼らが求めていたことは医療行為ではなく、じっくりと話を聞いてくれる存在がいつも自分たちのそばにあるということです。

「お医者さんのお茶っこ」は、今までよりも少し訪問のペースは少ないものの4月以降も継続しています。これからもまだまだ継続していくつもりです。昨年冬には多くの方に物資を支援していただきました。東北には行けないけれど、自分も力になりたいと言ってくれたホスピスの入院患者さんには、その方のお気持ちを私が持っていきますとお約束しました。ホスピスで活動するボランティアさんからもたくさんの応援の言葉をいただきました。そのことを被災した方々にお伝えするととても喜んでくださいます。復興への道りはまだまだ厳しいです。被災した方々の願いはこの震災のことを忘れないでいてほしいということです。みなさんの心のすみに、ふと東北の方々に思いをさせて下さる時間があると嬉しいです。

* 「お医者さんのお茶っこ」に関してのお問い合わせはホスピス大井までメールでお願いいたします。

oishasan_ochakko_ohi@yahoo.co.jp

** つなげるつなげる委員会ホームページ

<http://tunagerutunagaru.net/index.shtm>

チャリティーコンサート♪ ～ご協力ありがとうございました～

今年度の聖ヨハネホスピスのためのチャリティーコンサート「祈りの花束」は、6月1日武蔵野市民文化会館にて開催されました。多くの方々の温かいご支援のお蔭で今回も盛会裡に終えることができました。厚くお礼申し上げます。社会福祉法人聖ヨハネ会には収益金の70万円をお届けい

たしました。

来年度は新たな趣向のチャリティーイベントを別記のご案内のとおり、開催する予定です。心軽やかな春のひとつときをお楽しみいただきたいと思います。皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

(「風の仲間」ボランティア 吉川訓子)

聖ヨハネホスピスのための コンサート & バザー

〈主催〉 「風の仲間」 & 桜の会

2013年5月11日（土） 会場：カトリック小金井教会
1200円 茶菓付 （小学生以下無料）

13:00～14:00（開場：12:30）

〔コンサート〕 **5月の風にのせておくる ～ マリンバと名曲たち**

マリンバ 浅田実可 松澤芳枝／アコーディオン 熊坂路得子
他 パーカッション

〈曲目〉トロイメライ、八木節、となりのトトロ、ラ・パロマ ほか

14:30～16:00

〔バザー〕 **好評の“ハートのTシャツ”、温もりある手作り作品、美味しい食材、
ホームメイドのお菓子などなど、うれしい品々がいっぱい。お楽しみに!!**

◇収益金はすべて社会福祉法人聖ヨハネ会に寄付され聖ヨハネホスピスのために役立てられます

チケット発売開始：2013年3月15日

申込み・お問合せ：下村はるみ Tel. 042 (384) 4380 Fax. 042 (388) 0110

吉川 訓子 Tel/Fax 03 (3307) 3546

研 究 所 だ よ り

第6回 講演会のご報告 ～

昨年12月1日、武蔵野市民文化会館にて、満100歳を迎えられました日野原重明先生をお招きし、ケアタウン小平との共催のもと、『日野原重明 100歳 いのちを語る』の講演会を開催いたしました。1300人の客席を有する大ホールは満席。今回もほんの一部ではございますが、日野原先生のパワー溢れる貴重なお話をご紹介します。

聖ヨハネホスピスケア研究所 近藤 百合子

<日野原先生のご登場！>

たくさんの拍手の中、両手を高々と上げて日野原先生ご登場。大変小柄な先生ではありますが、とても大きなお姿に見えたことを思い出します。

冒頭、先生は「私は3年前に呼ばれました時にも講演をさせていただき、“3年後、私が100歳になったら行きますよ”と約束をした。その約束を果たすために今日ここに来たのでございます。

今日私は1時間の時間をもらっていますが、今年は皆さんに一番大切な話をしたいのです」とおっしゃり、先生は“いのち”について語り始めました。とても100歳とは思えないほどの力強く張りのある声。ご参加くださったお客様全員、先生の言葉に耳を傾けています。大拍手からは一変し、会場は心地よい緊張感が漂い、これから先生がどんなお話をしてくださるのかと、皆、ワクワクドキドキしているように見えました。その様子は舞台裏のスタッフにも十分に伝わり、我々も背筋を伸ばし、集中して先生の言葉に耳を傾けました。

<大切なものほど目に見えない>

先生は、30年前から小学生を対象に“いのち”について考える授業を行っておられます。「自分たちはいのちを持っているか?」「いのちはどこにあるか?」「いのちって何?」「いのちって目に見えるもの?…」と小学生に問うそうです。大抵の小学生たちは、いのちの場所の問いに対し、心臓に手を当てるそうですが、皆さんはどのように考えますか?

小学生の答えに対し先生は、心臓は止まったら死んでしまうから、心臓の中にいのちがあるのではないということをしかりとお教えになるそうです。さらに、「酸素は見える?酸素は見えない。時間は見える?昨日の時間、明日の時間も見えない。見えないものが大切なんだ。本当に大切なものは見えない。だからいのちは目に見えないのは当然だし、触ることができないのも当然。そういう目に見えないものをみなさんがどういう風に使っているか、みなさんが生きるってということなんです。生きるってということは、みなさんが与えられた時間を自分で使うことです。いのちというものは、みなさんの使える時間のことですよ」とおっしゃいます。このことは小学生に対してもお話するそうですが、わずか10歳であっても十分に理解できるというこいとを語っておられました。先生が5年前に出版した『10歳の君へ、95歳の私から』という本の中でもその授業の内容を紹介しているそうです。ご関心がございましたら、是非、皆さんも先生のご著書をお手に取ってみたいかがでしょうか。

<挨拶や声かけは“ラ”の音で!>

皆さんは普段、家族や友人、会社の同僚などに

挨拶をする際、どんなことに気を配って声をかけていますか?自分も相手も気持ちが良いと感じるような声かけを心がけているのでしょうか。日野原先生は、言葉の調子というのは、その人がいのちを表現している一つの道具になっているとおっしゃいます。例えば、オーケストラの音合わせも“ラ”の音に合わせるそうで、“ラ”の音というのは、非常に気持ちのよい音とされているということです。そこで先生いわく、家に帰宅した際も“ラ”の音で「お帰りなさい」或いは「帰りました」ということが良いのだそうです。一方、音域としては低い“ド”の音で「お帰りなさい」「帰りました」というと、コミュニケーションを非常に悪くすることにつながるということをお話されていました。つまり、言葉を通したコミュニケーションでは、音というものがとても大切であり、音の調子が合うとお互いに気持ちよくコミュニケーションが図れるということだと思います。音域だけではありません。やはり、はっきりと相手に言葉を伝えることも大切なことです。皆さんの中には早速“ラ”と“ド”の音での「お帰りなさい」を試しておられる方もいらっしゃるかもしれませんね。“ラ”の音での挨拶や声かけ、覚えておきたいと思います。

<長寿の秘訣>

長寿には秘訣があるそうです。一つ目は、食事制限をしながらカロリーオーバーにならないようにすること。先生は今でも全国を飛び回り、多忙な日常をお過ごしですが、カロリー計算をしかりと行い、一日1300kcalに制限していると聞いたことがあります。朝食はコーヒー、ジュース、ミルク、オリーブオイル。昼食はミルクとクッキー2個。夕食はお茶碗半分程のご飯にたっぷりの野菜とヒレ肉かお魚。それで十分とのことでした。更には、食べ放題で元を取ってやろう!なんていう考えも健康には良くないと聞いた記憶があります。耳の痛い話ですが、やはり何事も基本は食生活ということが良くわかります。二つ目は、運動だそうです。年をとると関節痛などのために運動ができなくなるけれど、先生は毎週1回、1時間のストレッチを習慣にし、体を柔軟にするよう心がけているそうです。一時期、やりすぎたために肉離れをしたというお話もありましたが、長生きの秘訣は、適度な運動を週間づけることが大切だ

ということです。三つ目は、精神を若くすること。若さを保つために一番必要なことは、精神や気持ちの若さを保つことが大切なのだそうです。そのためにもっと大切なことは子どもや若い人との交流が絶対的に必要だと先生は強調されておりました。将来や未来を持っている子どもたちと一緒に、いろんなことを学ぶことが必要であり、それが長生きの秘訣だそうです。日野原先生が提言される長寿の秘訣は、“食生活”“運動”“生きがい”ということです。最期まで若々しく、そして豊かな人生を送るために、先生から伝授された長寿の秘訣、忘れないでいようと思います。

<ご遺族や被災した方々にどんな言葉を掛けられるか>

日野原先生のご講演後に、当研究所所長の山崎との対談がありました。その中の一つのテーマとして、“不慮の事故や災害等で大切なご家族を亡くしたご遺族の方々に、どのように言葉をかけたら良いか…”ということについて対談されました。苦しみや悲しみの渦中にある方に対し、何て言葉をかけたら良いかわからない、かける言葉が見つからない…という経験は誰しも体験していることだと思います。日野原先生は、昨年発生した東日本大震災の際に南三陸町へ訪問をしておりますが、その時の状況を思い浮かべながら「生き残った人の中には、子どもは死に親も死んでいるが自分だけが生き残ったという人がかなりいることを知りました。その人は自分が死ななかったことに対する罪悪感が強いんですね。自分だけ生き延びたという人は罪悪感を持ってこれから生きなければならない。私は、そういう悲しみやショックを受けられた方に会うときには、まず手を取ります。言葉からではダメです。手を握って、私の体温を伝えるようにしっかりと握ります。手と手を結び、その人の目を見ながら“私はあなたに対して何ができるでしょうか？”と私の気持ちをスキンタッチすることで、心を手の間から流すようにします。自分の言葉が魂のようになって相手の中に流れ込むということを是非、大切に…」と。確かに、言葉は相手への励ましや慰めになることもありますが、一方で容易に人の心を傷つけてし

まうこともあります。この対談を通し、苦しんでいる方々に対する関わりとして大切なことは、言葉よりも先にまずはその方の目を見ながら手を取ること、優しいタッチで肩に触れるということ、そしてその状況の中で“一人ではないですよ”というメッセージと共に、そっと傍に寄り添い続けることの大切さというものを改めて気づかせていただいたように思います。更に先生は、“時間”も人間を救ってくれるものであるとおっしゃっていました。“時”を待つこと、そして自分たちが持っている生きる力を信じ、焦らず、今、一人ひとりができることに精一杯取り組むことの大切さも学ぶことができました。

講演会の最後には、指揮：日野原先生、オカリナ：三枝好幸先生（聖ヶ丘病院ホスピス長）のもと、会場にお集まりの方々全員が一つになり、「ふるさと」を合唱しました。2時間という長丁場。先生はお疲れも見せず、全身で指揮をされ、会場を一つにしてくださいました。終了後には握手会まで！ きっとお一人お一人、一生の思い出として心に刻んでくださったことと思います。そして幸せなことに、先生は5年後の再会も約束してくださいました。しかし、5年後に会えるかどうかについてはご自分のお体よりも会場の皆さんが元気でいられるかということをお心配され、思わず大きな笑いが溢れました。

5年後、是非先生との再会を楽しみにし、先生から伝授していただいた長寿・健康の秘訣に心がけ、必ずまたここで、皆様とお会いできることを願っております。

今回も講演会を開催するに当たり、ボランティアの方々や会場スタッフの皆様など、多くの方々にご協力いただき、無事に終了することができました。本当に皆様のお力のお陰であり、ご協力、ご支援くださいました全ての方に、心より感謝申し上げます。

是非、次回の講演会も、楽しみにしていただきたいと思います。

ケアタウン小平&聖ヨハネホスピスケア研究所 主催

第7回 講演会のお知らせ

演題 「鎌田 實 いのちを語る」

日 時：平成25年3月14日（木）11：00～13：00

会 場：武蔵野市民文化会館

参加費：3,000円 定員：1,300人

プログラム：1. 講演 鎌田 實 先生
(諏訪中央病院名誉院長)

2. 対談 鎌田先生、山崎章郎医師

申込み方法：

以下の方法のいずれかでお申込み下さい。 折り返し、参加費の納入方法をご連絡します。

- A) ファックス B) 郵送 (必ず80円切手をご同封下さい)
C) Eメール

いずれの方法でも下記の5つの必要事項と、「講演会希望」とご明記下さい。

必要事項：①お名前（フリガナ） ②郵便番号 ③連絡先ご住所（ご自宅又は勤務先）
④お電話番号／FAX番号（ファックスでお申込みの方は必ず） ⑤ご職業

申込み期限

2013年 2月22日（金）まで

ただし、2月22日以前に定員になりましたら、締め切りとさせていただきます。

申込み先：聖ヨハネホスピスケア研究所 講演会受付係

〒184-8511 小金井市桜町1-2-20 TEL 042-380-7820（平日13時～17時）

FAX 042-380-7826（24時間）

Eメール：inotiwokataru2012@yahoo.co.jp

聖ヨハネホスピスのよりより運営のためにご支援ください

社会福祉法人聖ヨハネ会は、ホスピスのより良い運営のために皆さまからのご支援をお願いしております。ご支援くださった方々には、今後この通信（年2回発行）を通して連絡させていただき、ともにホスピスを育てていきたいと願っています。一人でも多くの方々がご支援くださることを心よりお願い申し上げます。

ご支援の受け入れ口座は以下のとおりです。

銀行振込 三菱東京UFJ銀行 小金井支店 NO 4127570

口座名 社会福祉法人聖ヨハネ会（普通預金）

郵便局振込 口座番号 00190-7-711126

加入者名 社会福祉法人聖ヨハネ会

（振込用紙に通信欄に“ホスピスのために”とご明記ください。）

お問い合わせは・・・〒184-8511 小金井市桜町1-2-20

社会福祉法人聖ヨハネ会本部事務局 Tel 042-384-4403